

最近感じたこと

平沼 謙二

日本学術会議が新しく3部制になって3期を迎えました。第七部は第二部の生命科学の中に統合され広い視野の中で活動することになったと思います。

この3つの部のなかで各部は対外的な問題と対内的な問題に対応され、その活動は毎月の“学術の動向”に示されており、興味深く読ませて戴いております。

日本医歯薬アカデミーは2006年6月に“日本学術会議の第七部のあゆみ”を発行し、その貴重な記録は第二部の関連する会員への参考と思っています。

その中で私は咬合研連の活動として歯科の基礎、臨床にとって重要な“咬合”について論じてきました。咬合—そして“噛み合わせ”はそれ以後の研究により明らかにされてきましたが、さらに関連する顎口腔機能についての研究が進められて来ています。それは中枢機能を中心として体全体に大きな関連を示しており、咬合の重要性を再認識することになります。

さて現在、第二部の活動の中で、第七部的な問題が用される環境があるのかは解りませんが、“学術の動向”の終わりにある“会長からのメッセージ”は日本学術会議のその折々の全体的な活動と様子を示されており、現時点の方向を知ることが出来ます。

19巻9号には報道機関が学術会議に関する事項について、提言、あり方などを社説に取り上げる回数が増えて来たことなど、19巻11号には一般向けの学術講演会が学術会議の認識度を高めていることを記していますが、学術会議には広報活動の予算がなく、全国的に知らせることが難しいとしています。

“学術の動向”の終わりにある“情報プラザ”に学術講演会、シンポジウム等のお知らせがありますが、一般の学術関係者にはこれを見ないと知ることは出来ません。これにも対外的な広報活動が必要と思います。

20巻1号の“会長からの年頭メッセージ”には若手アカデミーの発足に大きな期待を寄せていることが述べられています。また、SCJトピック“科学研究の健全性向上のための共同声明”は研究者として十分に認識すべきでしょう。

この各号にある学術講演会、シンポジウムはどの部が主として開催するものか、あるいは2つの部の共同によるものなどが示されると各部の活動が、あるいは学術会議としての考えをより解りやすく知ることが出来ましょう。

また、本アカデミーは第二部の医科系、歯科系、薬学系の先生方への支援と、日本医歯薬アカデミーの活動に御協力戴くことが更に重要なことであると思っています。

本アカデミーの更なる発展を祈念致します。

●プロフィール

平沼 謙二

日本学術会議咬合学研究連絡委員会委員

日本学術会議第16・17期第七部会員

愛知学院大学名誉教授